# 黄長燁氏による政府関係者等向け講演会記録
# （平成２２年４月６日（火）13:30～15:00）

○司会　それでは、定刻でございますので、黄長燁（ファン・ジャンヨプ）先生をお迎えしての講演会を始めさせていただきます。初めに、中井拉致問題担当大臣から御挨拶をさせていただきます。

○中井拉致問題担当大臣　皆さん、こんにちは。黄長燁先生をお招きして講演会を開催いたします。

急遽なお招き、また場所を伏せてのお招きと大変失礼なご案内にもかかわりませず、お忙しい中、このようにお集まりをいただきましたこと、招聘者といたしまして心から感謝を申し上げます。

黄長燁先生についてはもう私が申し上げるまでもありません。北朝鮮におきまして、最高人民会議議長、労働党国際担当書記等の要職を歴任されてこられました。そして、1997年、韓国へ亡命をされ、その後講演や執筆活動等を通じて北朝鮮の実態、こういったものを広く国際社会にお訴えをされ、活動を続けられておられます。本日、お手元にご本をご寄贈いただきました。これは近々出版される本を直前に日本で皆様にお配りすると、こういうご好意によるものでございます。

長くこの黄先生を私ども日本はお招きをしたいと考えていろいろな形でご招聘を申し上げておりましたけれども、タイミングがあわずお招きするのは困難かなとこういう思いもございましたが、今回黄先生のご決断、そして韓国側の大変なご配慮で、アメリカからの岐路、日本にお出でをいただき、ごくごく内密な関係者の皆さんとだけお目にかかる、こういうことになりました。

改めて韓国側のご配慮に感謝を申し上げ、お越しをいただきました黄先生に心から歓迎の意を表する次第でございます。

お招きしておいた後から八十数歳というお年を聞いて、ああ、大丈夫かなと少し正直心配をいたしましたが、お越しいただきましたら、なんのなんの、かくしゃくたるものでございまして、昨日も私ども議員との会談、そして家族の会の皆さん方等との会食等、本当にハードスケジュールをかくしゃくとしてこなしていただきました。私どもから見れば議員の仲間から少し失礼な質問も飛んだりいたしましてご不快な面もあったかとこう思っておりますが、淡々と事実をお答えいただきまして、大変感激をいたしていると

ころでございます。

今日も実経験に基づいたお話、また深い分析からくる現在の北朝鮮についてのお考え、いろいろとお聞かせをいただき、お時間があればまた質疑等を賜って、今後の日本の対北朝鮮、また対拉致問題解決、これらの点で有意義な方向づけができれば、招聘者拉致担当大臣としてこれほどうれしいことはございません。

どうぞ、お時間の許す限り、ご懇談、お話をお聞きいただき、またご質疑等を賜りますようお願いを申し上げて、皆さん方に対する御挨拶、そして黄先生に改めてお礼を申し上げて御挨拶といたします。

ありがとうございました。（拍手）

○司会　ありがとうございました。

それでは早速、黄長燁先生にご講演を賜りたいと思います。恐縮でございますが、ご登壇をお願いいたします。

○黄長燁氏　それでは、尊敬する皆様の前で幾つか北朝鮮問題の解決に関する問題についてお話ししたいと思います。

まず、北朝鮮の問題をどのような立場からアプローチし、どのような立場で解決すべきかということですが、まず第一に、徹底した民主主義の原則にのっとって北朝鮮の問題を解決しなくてはいけません。

民主主義的な立場から見ますと、北朝鮮の主人は北朝鮮の国民です。北朝鮮の人民、国民を抑圧し、そして餓死に至らせ、すべてを奪う独裁者が主人ではなく、苦痛と不幸を経験している2,300万の北朝鮮の住民が北朝鮮の主人だと考えなくてはいけません。

しかし、残念なことに、そうではない場合が多々あります。あたかも北朝鮮の主人はその今の独裁集団であるかのように考え、北朝鮮問題にアプローチする人が多いわけです。私は何のことを言っているのか皆さん多分おわかりになると思います。何さえ解決すれば体制を保証する、何をしてくれればどうやると、これは民主主義的なものではないと思います。

しかし、北朝鮮の政権は国際的に承認された政権であり、現実的に2,300万を統制している政権であり、だからこそ無視はできません。したがって、私が常日頃から主張しているのは、北朝鮮の独裁政権に対しては敬遠すべきだと。敬いながらその実余り期待をしてはいけないということです。

対外政策というのは対内政策の延長だと思います。皆さんもご存じのように、有名な１つの大学にはこういったくだりがあります。近い人々に対して当たる人が遠い人に対しては歓待できるだろうか、それはあり得ないと。自分が統治する人民、国民を300万以上餓死させ、そしてすべての国土を監獄にし、経済的権力、政治的権力、すべてのものを奪い、とうとう精神すらも奪ってしまう、そういった者が他の遠い者に対してもよく待遇するでしょうか、ほかの人々。韓国の国民、同胞に対してもちゃんと接するでしょうか。彼らの話をそのまま鵜呑みにしてはならないでしょう。

ですから、今の政権に対しては敬い、しかし遠ざける。ヒトラーのようなものです。金正日に対して期待をして一体何の利益があるでしょうか。全くあり得ません。私はですから、金正日の私生活については余り話をしたくありません。それよりも客観的な事実、彼がしてきたこれまでのことが、彼がどういう人物であるかを物語っています。どういう政権であるかを物語っています。ですから、金正日政権に対しては、戦う必要もけんかする必要もありません。会談しようとすれば会談すればいいのです。しかし、期待をしてはいけません。声明を発表し、条約を締結し、しかしそうするからといってそれが多分余り役には立たないと思います。

それでは、北朝鮮政権の命脈を握っているのは誰か、それは中国です。ですから、我々が北朝鮮の問題を解決するに当たって、中国との関係をうまく処理しなくてはなりません。中国を相手にせず、金正日を直に相手にして解決するというのは原則的な方法でもありませんし、彼のトリック、まやかしにだまされてしまいます。いうならば、根本的に北朝鮮の存在に基盤を置いている、つまり北朝鮮の命脈を握っている中国を相手にせず、金正日を直に相手にするというのは、炎と戦うのではなく、その炎の影と戦うことと同じです。

それでは、中国の根本的な利害関係はどこにあるかということですが、中国は北朝鮮については領土の野心はありません。私は長い間国際関係を担当し、中国の人々とも多く接触しましたが、そういったことはあり得ません。なぜあり得ないかといいますと、現在13億というとてつもない規模の人口のために、その13億をいかに統一し統治していくかということで汲々です。そのために少子化、出産制限をし、大変苦心をしております。それなのになぜさらにそこに2,300万の、それも問題のある北朝鮮の国民をさらに受け入れようとするでしょうか。絶対それはあり得ないことです。そして、北朝鮮に天然資源があるかというとそうでもありません。韓国の人々が余りよく知らず北朝鮮にま

るで天然資源があるかのように言っておりますが、天然資源はありません。石炭も多くありません。アンジュ炭鉱という有名がところがありますが、黄海の下のほうに入ってしまったのでそれももう採掘することができません。このような状況のもとで、中国にはですから北朝鮮の領土についての野心はないのです。

そして、金正日の離間政策に惑わされ、そういった誤った世論を打ち出す人もいるでしょう。中国の東北プロジェクトとかそういったことですね。まるで中国が野心を持っているかのように言っている人もいますが、それは間違いです。

そしてもう１つの誤解ですが、中国があのように急ピッチで発展してしまうと、もしかしたら中国は以前の旧ソ連のような国に戻ってしまうのではないかと、そういった懸念を抱いている人もおります。それも間違った考えです。中国の人がソ連式社会主義をしていましたが、それでこの世界で最も過酷な難関に直面したわけです。中国人が経験したその悲惨さ、過酷さは想像できないと思います。私その本にも最後のほうにちょっと書きましたが、大躍進のときですね、58年に直接中国に行って見たそういった当時の状況を書いておきました。ご参考ください。

中国も長い間悩んだ末、改革開放の道に進んだのです。そして、豊かな暮らしというものを体験しました。それがまた昔の集団主義に戻るということはあり得ません。豊かな暮らしを経験した人々が改革主義的な社会主義に回帰するということを信じる人はマルクス主義を信じる人と同じことです。マルクス主義は結局は世界が共産主義になるということを信じているわけですけれども、マルクスの余剰価値説を信じる人と同じです。また、一部の人は中国は現在経済は資本主義だけれども、政治は共産主義だといっておりますが、そうでもありません。実質的なところを、中身を考察して判断する必要があります。市場経済を運営する政権が共産主義政権でしょうか。そういった政権があり得るでしょうか。共産主義政権というのは、市場経済を抹殺し、商品経済を抹殺し、すべてのものを供給制にするというのが共産主義政権の経済政策です。ですから、そのような誤解をする必要もありません。

それでは、中国との関係の中で何が必要かといいますと、中国の懸念というのは現在北朝鮮が自由民主主義化してしまいますとその思想が中国に入ってくるかもしれないということです。北朝鮮と東北地方の旧満州、そして朝鮮族は親戚関係がありまして、中国と北朝鮮の往来があるわけです。そういったことを通じて自由民主主義の思想が中国に入ってきますと、そうでなくても今中国が崩壊するおそれがあるわけです。13億の人

口が分裂する恐れがある中でそうなりますと、歯止めが効かなくなると恐れています。自由民主主義的な思想の浸透というのは致命打になります。これが中国が考えている最も大きな懸念、最大の懸念なのです。

ですから、改革開放を進めながら、中国は北朝鮮にも一緒に改革開放をしようというふうに説得してきました。そして、永遠に同盟関係を結び、ともに歩もうと言ってきたんです。ところが北朝鮮はしておりません。今もしておりません。ですから、北朝鮮が中国を訪問するといってもその訪問で終わってしまうでしょう。

中国式に改革開放をするでしょうか。中国式の改革開放は一体何かといいますと、難しく考える必要はありません、首領式の個人的独裁をなくし、市場経済を導入することです。首領主義的な個人独裁をなくすと、それはもう民主主義の第一歩につながります。また、市場経済というのは民主主義的な経済です。

しかし、それを北朝鮮は拒んでいるわけです。ただ、北朝鮮寄りの勢力、グループは北朝鮮が変わっている、変化しているといいますが、何が変化したでしょうか。変わらないところはないわけですが、何が変わったかが問題です。我々にとって重要なのは、首領式独裁主義を否定し、個人崇拝をなくすか否か、それが重要なんです。市場経済を導入するか否かが重要です。そういった意味で変化があったでしょうか。市場経済を導入するためにはまず農村問題から解決しなくてはなりません。現在最も問題なのは食料問題なんですけれども、食料問題を解決するためには社会主義的な協同組合を撤廃し、資本主義的な個人主義的な経営形態を受入なくてはいけないんですけれども、そうしてはおりません。商人ですとか手工業も受け入れていません。市場はローマ、ギリシャの時代からありました。太古の時代からあったわけです、市場というのは。

このような状況で、我々がいかにすれば中国が金正日政権との関係を断絶できるか、金正日政権と同盟関係を結んでいる中国人が北朝鮮に対して持つ影響力は０．０１％もありません、実は。同盟国関係を結び、血盟といっておりますが、彼らに対して仲裁の役割を期待できるでしょうか。期待できないのです。

ですので、北朝鮮の誰かが中国を訪問してもそれは何にもならないのです。何を話したかも大体わかります。これまでの経験を踏まえますと、それはどういうことかわかるのです。ですので、これまでも言うことを聞かなかった人に対して彼らが好意的に思っているでしょうか。私が接触した中国の幹部の中で金正日を好ましい人物だと思っている人は一人もいませんでした。でも、断絶はしていない。なぜでしょうか。もし断絶を

して自由民主主義がその場に入ってしまいますと、中国の統一に致命的なダメージを与えるからです。

ですので、どうすれば中国との関係を正しくするのか、中国を排除してはいけません。中国を抱き込みながら、協力し合いながら、彼らの懸念を無くしてあげつつ、北朝鮮に対しては、北朝鮮の改革開放について彼らに責任をとらせるようにしなくてはなりません。あの北朝鮮に対して中国が国際社会においては責任があるわけですから、金正日のような国際的な犯罪者とつながりを持って同盟関係を結ぶのはあり得ない。ですから、中国の懸念は私どもが全部クリアをするので、北朝鮮が改革開放する方向にもっていってくれ、それだけを責任とってくれれば、他には何も我々は要求をしないと、こういうふうにすべきです。

これについてもちろん彼らはこういうふうに言います。金正日は我々にとっても悩みの種ですと。我々も核実験には反対ですと言います。じゃあ制裁をしましょうと我々が持ちかけると、それはできないというんです。対話で解決しなくてはならないと言いますが、結局は金正日との取引で済ませようということにしかなりません。ですから、だめなのです。

じゃあこれをどうすればいいのか。関係を断絶するのが重要です。１つ例を挙げてみましょう。以前中国においてこういう話を聞きました。金正日が余りにも改革開放に反対をするので、同盟関係は続けるが、思想的な同盟ではないといっておりました。思想的に同じ立場を守るだろうと期待するなと。また、南に対する侵略戦争、また北朝鮮に対する侵略戦争にも我々は反対すると。我々は平和を要求すると。そういった話をしましたら、それについては余り驚かないようでした。でも、韓国と国交を正常化するということになりまして、北朝鮮はこれに対しては大変驚きました。金日成はこれに対して、鄧小平に対してこれをちょっと先送りをしよう、１年でもいいから延長してくれといいましたが、中国は断りました。

中国は表面的には大変親切に接してくれますが、自分の利害関係がかかわってきますと全く譲歩をしないというところがあるからです。ですので、今でも韓国政府が中国と自由貿易協定を結べば、金正日に対してはこれは致命的な打撃を与えることになります。

私はこれに対しましていろいろな例を挙げたいんですが、例はたくさんありますので、１つだけ挙げてみましょう。私は、現在、小さなインターネット放送局を運営しております。規模は小さいんですが自由北韓放送というものです。ここで役員が私にこう言い

ます。直接北朝鮮にいる人物に対して呼びかける放送をしてもらいたいと私に要請をするわけです。でも、私は時期尚早だと彼らに言いました。もしも韓国政府が中国政府とＦＴＡを締結するならばそれはできるとは言いました。なぜならば、ＦＴＡを結べば軍隊が動くからです。でも、今の状況では北朝鮮の軍隊は起き上がりません。人権蹂躙が最もひどいところは軍隊です。こちらでは公開銃殺などについて人権蹂躙の例として挙げますが、それは北朝鮮では何でもありません。北朝鮮の軍隊こそ最もひどい人権蹂躙の場なのです。勉強しなければならない若者を連れていって、10年、20年の間金正日のために銃弾になるように強要します。その兵役が終わりますと故郷に帰さず、もちろん故郷に帰る者もいますが、故郷に帰らせず、なぜならば思想が変わるということで炭鉱などに行かせます。ですので、一生を彼らは棒に振ってしまうのです。ですので、いくら洗脳教育をしても彼らはもうその恨みつらみが芯まで骨頂まで達しています。軍隊の旅団長以下の人たちはすべてそういう思いを持っています。もちろん旅団長以上のものに対しては特別待遇をするのでそうではありません。

ですので、現在北朝鮮の軍隊の生活は余りにも悲惨でありますので、起き上がる、立ち上がる可能性はありますが、中隊以上です。彼らが立ち上がっても今の状況では全部犬死になります。最近保衛指導員が小隊まで、統制が厳しくなりました。しかし、中国との関係がこのように冷え込み、中国側が承認をしないということになりますと、状況は変わってきます。軍隊から立ち上がるでしょう。それについてはもうなすすべがありません。

その時になりますと、我々も声を高くすることができますし、放送もできるでしょう。ですので、これに対して皆様は中国との関係をどのように構築すべきなのかについてのご参考にしていただければと思います。

また、１点申し上げたいことがあります。断絶方策とともに、中国を抱き込みながら、中国は5,000年以上の歴史がありますので、絶対だまされません。聞こえないふりをしてもすべて聞いています。これが中国の人です。ですので、正直に中国の人たちと会話をし、彼らを抱きこみながら密着をさせる方策も並行して行わなければなりません。そして、北朝鮮を改革解放さえするようにしてくれれば、すべてほかの懸念は我々が解決すると、こういうふうに言ってあげるべきです。核問題も解決しますし、人民の生活難も解決されます。戦争への脅威もなくなります。

アメリカに対しても、中国に対してもこの話を私はしました。これは中国、アメリカ

にとっても、そして韓国にとってもすべて利益になります。吸収統一の準備は今南北とも準備されておりません。まだその準備は整っていないのです。しかし、またこれに対しては、中国は絶対反対をしますので、可能ではありません。

しかし、中国式の改革開放は中国人も望むところですので、そういう方向に導いていければ、北側はそういう方向にいけば市場経済が導入されて、南北関係も我々が改善するに当たってよい方向に向かっていくでしょう。

現在連邦制は我々にとってはマイナスになるかもしれませんが、最終的にはプラスになります。我々の技術、資本が入って20年ぐらいたてば相互の差異も余りなくなりますし、中国の人もアメリカを脅威に感じないようになります。また、アメリカも中国を脅威に感じなくなるでしょう、そのときになれば。

したがいまして、北朝鮮問題の当面の解決というのは中国式に改革開放をさせるということであります。これがまず第１点目のポイントです。金正日政権に対しては、表面的には敬意を見せるということです。

２点目は、軍事的な力をもってこの北朝鮮問題を解決してはなりません。もちろん軍事力の増強は重要でありますし続けるべきです。独裁政権が暴力を行使しないように牽制するためにも、我々の軍事力が圧倒的に優位に立つべきです。彼らがまた挑発的な行動に出ないようにするためにも必要です。もちろん挑発挑発といいますが、小さい挑発は余り大きい問題にはなりません。国境を越えてそこで武力を行使できないようにすればいいのです。

これは大変私が切実に感じるところなんですが、お時間が余り無いので、これ以上はお話しできませんが。アメリカ、日本、韓国が軍事力をそれぞれ強化することによって、絶対に北朝鮮集団が武力を国境を越えてまで行使できないようにすれば、これを徹底すれば、彼らは鴨緑江を渡らないでしょう。豆満江を渡らないでしょう。また、軍事境界線を渡ってはこないでしょう。それだけはぜひ記憶をしていただきたいと思います。96年にそういうこともありましたが、この軍事力は重要ですが、これにすべてをかける必要はありません。軍事力にすべてをかけてしまいますと、今の原子爆弾ではなくて水素爆弾までも使わなくてはなりません。それは結局は勝っても負けたと同然です。軍事力に費やす10分の１の費用でいくらでも武力以外の方法で問題を解決することができます。

これは思想戦、そして外交戦、経済戦であります。直接北朝鮮の非人道的な反民主主義的な政権を暴露するのはＮＧＯに任せましょう。そして、韓国のＮＧＯが日本のＮＧ

Ｏと手を組んでそういうことをしてくれています。そして、世界の世論を喚起させ、いわゆる金正日独裁政権を思想的に、精神的に孤立させ、打撃を与え、また住民を覚醒させ、そういった世論が中国の人民に入るようにするのです。中国の人々も以前と違います。そういったことがどんどん入っていきますと、中国の上位層も無視できません。これは武力を使う10分の１の費用でできることなのです。もちろん可能です。もっともこれをやらない状態でそういうことを考えもせず武力のほうで解決をしようとするのです。戦って勝っても良いことではないので、戦わない方がより良いのです。

人間の生活力というのは精神的な部分、精神的な生命力と物質的な生命力、また社会協力的な力というのがありますが。最も精神的な部分が重要です。これがないと負けてしまいます。精神力において勝てば結局は勝つのです。時間がかかるようですが、回り道のようですが、一番近道です。ですから、思想戦というのをまず基本にしなければいけません。これは単なる心理戦ではありません。

そして、その解放をする主人を目覚めさせ、そしてそれを民主主義的にするものです。これが原則です。これについては人権擁護をまず中心に扱わなくてはなりません。

２つ目は、経済戦です。経済的に孤立をさせるということですが、経済的に孤立させるためのポイントというのは自由貿易協定を締結することです。日本とアメリカと中国と韓国がそれぞれＦＴＡを締結することです。経済の専門家の話によりますと、締結すると韓国にはデメリットがあるといいます。ただ、それはデメリットではあっても政治的な投資だと考えなくてはいけません。

アメリカとの自由貿易協定、日本とのＦＴＡ、中国とのＦＴＡ、これは極めて重要なことでありますが、まだ実現に至っておりません。ですから、経済戦では最も重要なのが自由貿易協定の締結です。

外交戦においては何かといいますと、日本、アメリカ、韓国が民主主義的な同盟を強化することです。そして、民主主義同盟を強化し、中国を引き込んで中国に責任を与えて、その責任を全うさせていくということです。

簡単に我々が北朝鮮問題についてどうすべきかということについてお話ししましたが、最後に、すべてのことにおいて重要な基本になるのは、民主主義の同盟を強化することです。それは今の時代が世界化の時代になっており、世界化というのはもう防ぎきれない歴史の流れとなっております。

それでは、この世界化、グローバル化というのがかつてのような帝国主義の世界化で

しょうか。戦国時代のように強いものが弱いものを虐げる、支配する、そういったものでしょうか。そうではありません。民主主義的なグローバル化、世界化なのです。

民主主義的にグローバル化、世界化する問題というのは、結局現在の民主主義の限界を超えることになります。今の民主主義の限界というのは国家を基本単位にしています。アメリカのような国は民族問題、人種問題も解決しましたし、個人主義的な民主主義で解決できることはすべて解決しております。ただ、国家の範囲を越えてしまいますと、国益を権威主義的に考えてしまいがちです。

ですから、グローバル化、世界化に進めばさらに民主主義が発展します。グローバル化に進みますと、今の民主主義をもう１段階発展させることができるんです。皆さんも一度考えてみてください。これまでも民主主義というのは歴史的に大きな貢献をしてきました。実際人類の生活を根本的に変えました。しかし、今ではそれが余りにも個人主義に走った余り、集団的に結合し、団結し、遠い未来を見すえながら協力するところが足りなくなっております。市場経済主義で100年先を見越して努力する、そういった動きがあるでしょうか。個人の欲望というのはその一生で終わってしまうので、遠い未来を見すえることはできません。また、一般大衆というのも遠い未来は見れないのです。

ですから、人類がいかに発展すべきかということを考えながら、遠い未来を見ながらこの問題は解決しなくてはいけないのです。すべての発展は協力を通してのみ行われます。ここのところが過去誤った考えだったんです。闘争が発展の源だというふうに考えておりましたが、闘争は何もつくり出すことはできません。

発展するためには、創造しなくてはいけません。つくり出さなくてはいけません。そして、発展を阻害する要素を取り除くためのものが闘争であって、つまり発展の条件を整えるのが闘争です。闘争自体は発展の動力にはなりません。発展は唯一協力によってのみ行われます。もちろん経済によっても発展できますが、遠い未来を見すえて発展するためには、我々の現在経済危機、金融危機に直面しています。また、失業者もふえております。このような弱点をすべて克服し、そしてさらに民主主義をグローバル化、世界化し、そしてそのためにはこれまでの個人主義のメリット、長所というものを全部あわせて協力しなくてはいけません。

そして、個人主義を無視する集団主義、これは全体主義です。そして、個人主義だけがまた先走りますとこれも利己主義になります。人間は最初から個人的な存在であると同時に、集団的な存在です。これは永遠なる真理です。人間だけではなく、これは動物

もしかりです。そして、無生物物質も同じです。個体であり、集団であるのです。ですから、永遠にその基本は個人的な存在であると同時に、集団的な存在であり、それぞれのメリットを組み合わせるのが我々の発展の秘訣だと思います。

そして、それをするためには、結局民主主義的な同盟が必要となります。民主主義的な同盟が必要なのです。これはどこでヒントを得たかといいますと、冷戦です。ソ連はあのように強力な軍事力を持っておりましたが、アメリカがそれに屈せず武力を行使できなくしたんです。そして、銃一発撃てず、ソ連は屈服したんです。その戦略を今我々が冷戦時代において我々が勝利を得たわけですけれども、それを最後まで追及せず独裁政権を過小評価したんですね。そして、あのちっぽけな金正日政権を解決できず、大国が、北朝鮮より10倍、数百倍もの力を持っているそういった国々が北朝鮮問題で頭を悩ませているのです。

国内で民主主義を発展させる、そしてまた海外で、世界で民主主義の力を発展させるために重要なのは、民主主義に基盤を置いて世界的な民主主義同盟を強化させなければならないんです。

まず第一に、暴力を行使できないようにすることが先決です。その力があるでしょうか。はい、あります。今それぞれの国は国境をなくす問題はまだ時期尚早でしょう。それについては賛成しません。しかし、現在の状態でも暴力を行使できずに、世界に恒久な平和をもたらせ、世界の正義ともいえる法的秩序を構築することはできます。アメリカのような民主主義国家が団結すればいくらでもできるんです。そこからまず実現しなくてはいけません。

すべての戦略は目的によって規定されます。その目的がないために現在の成果に汲々し、そして前に進めないのです。それが今の弱点です。今の状況に満足せず、もう１段階発展するためには国家本位主義、国家を単位とする民主主義をさらに発展させるためには、民主主義の同盟を強化させなくてはいけません。

時間が余りありませんので、これぐらいにし、その本にも少し書いておきましたので、ご参照ください。圧縮してまとめて書いてありますが、翻訳した内容を私まだチェックしておりませんので、慌ててここに持ってまいりましたので翻訳がどうかわかりませんが、大意は把握できると思います。

それでは、これから皆さんの質問にお答えしたいと思います。（拍手）

○司会　黄長燁先生、どうもありがとうございました。

それでは、この後質疑応答の時間に入りたいと思います。質問のあられる方は恐縮でございますが、挙手をお願いできれば、私のほうでご指名をさせていただきたいと存じます。それでは、限られた時間でございますが、質疑、意見交換の時間に移らせていただきたいと思います。どなたからでも結構でございますが、ご発言のある方は挙手をお願いできればと存じます。

Ｑ：今日は時間の制限もあると思いますので、２点だけ申し上げたいと思います。

まず１点は、先生に対してお礼を申し上げたいと思います。昨年11月に先生とお会いして先生と２時間ほどお話をさせていただきましたけれども、貴重なお時間をその時いただきましたことに対して、この場をお借りして改めてお礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

そのときに、先生は、来年春には日本に行きますよと、今日配られた著作を皆さんにお配りするタイミングで日本に行ってお話をしますということをお約束されましたけれども、そのお約束どおり先生が今回来日されて我々にお話ししてくださって、著作も配っていただいた。先生はお言葉どおりそれを実現してくださいました。そのことに対しても深くお礼申し上げたいと思います。ありがとうございます。

２点と申し上げましたけれども、もう１点は、日韓両政府に対しての期待を込めて要望を申し上げたいと思います。今回の来日はいわゆる日韓両政府の協力のもとに実現したものだと思います。日韓ＮＧＯ団体がもっと連携を密にして、先生がおっしゃる思想戦、これを全面的に展開していくためにも、民間レベルでの招聘、あるいは民間同士との交流、あるいは先生ご自身が、セキュリティの問題もあるかと思いますけれども、もっと日本国民に対してあるいは国際社会に対して講演をする機会を日韓両政府でもアレンジしていただければなという思いを強く持っております。セキュリティの関係で限られた人たちのみの講演会になっておりますけれども、今後の要望としましては、国民あるいは国際社会に訴える機会をもっと設けられるような展開が行われれば一番ベストかなと思っております。

今後民間団体としては先生がおっしゃっている韓国の各ＮＧＯ団体とももっと連携を密にして、この思想戦、それから経済戦、外交戦のバックアップができるように努力してまいりたいと思っております。

この２点だけ申し上げたいと思いましたので、お聞きください。ありがとうございま

した。

Ａ：２点とおっしゃいましたが、最初のことは良く分かったのですが、もう１つは何なんでしょう。最初の質問。

　では１点だけについて申し上げます。実は私も韓国と日本の同盟関係、協力関係が大変重要だと思っております。また、そのためにはよく会って議論の場を設けるべきだと思います。１回限りでは本当に少ない話しかできません。１回限りに会いに来た方は、それでもう済んでしまったと思って二度と会いには来ません。私のほうからは行けませんので。ですので、思想もまあこんなものかなというふうに思っているようです。１回限りで全てが分かった気になってしまったのでしょうか。ですので、もちろん今申し上げたような方も実はこの場にきょういらっしゃいました。

　ですから、そうしないためにも一定の組織をつくる必要があります。昨日も国会議員の先生方に対しまして日韓友好協会など国会議員によるそういう集まりもあるようですが、あくまでも民間によるＮＧＯによる団体を組織して議論をしたりする場を設けたいと思っております。そういう組織づくりは必要ですので、今回それにつきましてもぜひ協議をして、また何らかの合意を得たいと思ってまいりました。

Ｑ：お目にかかれてうれしく思います。北朝鮮の金正日総書記の健康状態から見て、私たちは北朝鮮に重大な変化が起きるときがやがて来ると考えなければなりません。そのときにどのような形で北朝鮮の国民のために平和と安定をもたらすのか。先生は中国を巻き込むことということをいろいろとおっしゃっておりましたけれども、中国がたとえ領土的野心を持っていないとしても、中国の現在の一党支配の体制、私たちとは価値観が異なる国の影響が現在の北朝鮮に及ぶことは、韓国、日本、及び自由世界にとってむしろマイナスなのではないかと思います。北朝鮮有事の際にどのように朝鮮半島自体を将来の統一に向けて最もよい形でまとめていくのがよいとお考えでしょうか。

Ａ：はい。質問の内容をきちんと私が理解したかどうかわかりませんが、私が理解した限りでお話をしたいと思います。

　まず１点目なんですが、我々が今望んでいることは何なのか。先ほども申し上げたように、現在自由民主主義という原則にのっとって吸収統一をする準備は整っておりません。また、中国もこれに対しては反対しています。準備が整い、また中国も反対をしないという方法は、じゃあ中国式の開放改革です。中国の人々を賛成にもっていくように

私が中国式というふうに話をしていますが、本当は中国式でもないんです。首領制をなくして市場経済制度を導入しようということであります。それさえできればよりよい方向にいくでしょう。後戻りはしないと思います。そうすれば、民主主義の第１ステップは既に上ったと言えるでしょう。

またそして20年ぐらいうまくそれを進めていけば、改革開放の方向に進んでいった北朝鮮政府は中国との同盟関係も維持しながら、また、アメリカとの協力関係を築くでしょう。そうすればアメリカも北朝鮮に対して中国と同じように接するでしょう。韓国も、アメリカ、日本との同盟を強化しながらも、中国を抱き込んでお互いに親しくすべきです。このように20年間ぐらい過ぎれば、お互いの中国とアメリカのお互いの誤解は解けるでしょう。そうすればすべてはうまくいくと思います。自由になると思います。北朝鮮の人権問題ですとか食料問題すべて解決できるだろうと思います。ですので、私はこの方法が最も無難であり、また一部の人はこれに対して、北朝鮮に対しては急変するだろうという見通しをしますが、私はそうは思いません。そのような懸念はする必要がないと思います。

有事には急変して大勢の難民が韓国に来る、日本に来るという話もありますが、私はそういうふうには思いません。300万人が餓死した時もそのようなことはありませんでした。また、北朝鮮で未来を見すえることができるように開放改革の方向に進むことができれば、誰も外国には行かないでしょう。韓国は故郷ではないんです。ですから、南には行かないでしょう。そういう懸念はする必要がないと思います。

ですので、そういう懸念を表明する人は多いんですね。親しくすれば中国と北朝鮮がぴったり密着するのではないかという懸念もありますが、それはそういう懸念は必要ないと思います。北朝鮮は中国の少数民族に成り下がらないでしょう、そうしたがらないと思います。

金正日がもしも何かがあって亡くなったとしても、死亡しても、急変はしないと思います。中国の支援は、中国はただで物資を与えてはおりません。政治的に支持をするということです。そうすれば、急変はしないでしょう。こういう条件の下、軍部が掌握するだろうとかそういう話もする人はいるんですが、以前私の経験にのっとって判断をすれば、まだ金日成、金正日の影響は大きいんです。特に金日成の影響というのは本当に大きいものがあります。また封建主義的な色がまだ濃いところですので、金正日に何かがあっても、金正日の妹であります金敬姫（キム・ギョンヒ）が生きている限りは、金

敬姫とその夫である張成沢（チャン・ソンテク）の勢力に対抗する勢力はいまだありません。

ですので、こういう人々はすべて含んで、全般的な雰囲気、一般な雰囲気は改革開放しなければならないという雰囲気にはあるんです。ですから、それに反対する人々は何の力もないのに自分の父親がパルチザン活動をしたので何らかのポストに居座っているものたちは反対するかもしれませんが、ほとんどの（人は、）体制はこのままではいけないと思っているんです。この体制は大変危険だからだめだというふうに考えている。ですから、そういう人々は国内では何も言えないんですが、国外、海外に行くと我々も開放改革をしなければいけないという人はたくさんいます。金正日さえ死亡すれば、一定の過渡期はあるかとは思いますが、そのままこういった状況が続かないと思います。混乱する状態にもならないでしょう。党の組織がありますので、それですべてそこでこういったことはきちんとすることができます。

軍隊もやはり現在の状況では、金正日が軍隊においては最も、軍隊の上位層には余り頭のいい人は配置しません。なぜならば、実質的な権限のある人には名誉を与えないんです。ですから、ポストは高くても、実質的な権限はないんです。党の組織は徹底した権限を持っています。

この組織部が４つの部署に分かれています。第１副部長というのがいまして、これまでも金正日が直接自分でそれをやっています。ですので、第１副部長の権限は秘書の権限よりも大きいんですね。政策の策定においてだけ何も言えないんです。

国際的な政策策定は国際秘書が行います。金正日が承認すればすべて執行されます。しかし、これは違うという指摘を受けますと、組織部がなぜそんな企画書を上げたのかと言われてしまいます。これは再検討しろと言われるのです。ですので、実質の権限は組織部が持っています。彼らは秘書でもありませんし、第１副部長です。

軍部においても結局は参謀的な役割をするのは大変すぐれた人々がやっていますが、でもこういう人々が大きな役割をするとは今のところは思えません。ですので、やはり組織部が最も力がある、権限があると言えるでしょう。どんな人が出ても党を掌握しなければなりません。軍隊だけでやっていくことはできないのです。軍はあくまでも人々、住民を脅かすために必要な存在であるからです。

ですので、何らか複雑なことが起こり、内務省等でこういう問題があるんですけれどもというと、金正日は、それに対して軍部が反対していると言えといいます。実はそう

ではないんです。でも彼はそう言います。

過渡期はもちろんあるでしょう。それがある程度は長引くかもしれませんが、そんなに長くはならないと思います。

Q：黄先生、よくいらっしゃいました。私は拉致被害者、田口八重子の兄でございます。

先生をお呼びした私たちは非常に期待を持って先生をお呼びして、またいろいろお話を聞かせていただけるかと思いました。先生が私たちの拉致被害者の家族はどこにいるのかという質問に対しまして、秘密のところにいるから出てこれないんだと。それから、重要な仕事をさせられているからとおっしゃっておりますが。私の妹八重子は拉致を22歳でされてから32年にもなります。そんなに長い間重要な仕事をさせるんでしょうか。それと、秘密の場所というのは先生さえもわからないところなんでしょうか。もし一朝有事のことがあれば私たちは韓国の軍隊にも米軍にも頼んで私たちの家族を取り戻すためにそこに行ってもらわなければ取り返せないんです。

そういったところで、先生の今までの経験からいきまして、もし一朝有事のときには軍隊が押さえているであろう、それとも労働党が押さえているであろう地下組織にまず率先して行きなさいと。そこから鍵は開けられるだろうというようなことを教えていただければありがたいと思います。

私たちは生きているか死んでるかもわからない状態が続いております。寿命にも限りがあります。拉致被害者も高齢になっているとともに、私たち家族も高齢になっております。どちらが先に死ぬかというような年齢になっておりますので、１日でも１時間でも拉致被害者救出に期待しているわけなんです。

よろしくお願いいたします。

A：１つ目の質問は、家族がどこにいるか本当に知らないのでしょうかということでしたよね。２つ目の質問については、要点を簡単に話してください。

Q：要点は、先生が拉致被害者を救出するときに当たりまして、どこへまず行けばその秘密の場所というのが先生の経験からいって。

A：その秘密の場所というのは分かりません。それはいろいろな任務を遂行しているから、どういうふうなところでこれをどういうふうな役割を果たしているかということは分からないです。

Q：もう１点は、長い間拉致被害者が拉致をされておりますけれども、私の妹は32年にも

なりますが、そういった長い間をいつまでも拉致被害者を重要な仕事として就かせているんでしょうか。

Ａ：そうではないでしょう。しかし、その重要な役目を果たした人はこちらに送ったらその秘密がすべて暴露されるからそれは送らないでしょう。

Ｑ：そうしますと、永久に今の金正日政権が崩壊しない限りは助からないということなんでしょうか。

Ａ：永久というのはないでしょう。永久ではないけれども、そのためには金正日がこの点では譲ったほうが自分の利益に合うという判断をするように何かの刺激を与えなければだめですよ。

Ｑ：この進展に当たりまして、北朝鮮と対話をしなさいと、対話をしないからこの問題は解決できないんだと言われておりますが、対話ということはその経済支援ということか、それともまた他にあるんでしょうか。

Ａ：経済支援がどのぐらいかというのが問題です。もしその秘密がとても金正日の正体を暴露するのに大きな価値があるときには、そのときには簡単な経済援助には応じないですよ。だから、この問題を解決するためにはその問題を大きく掲げて、六者会談でもそういう問題を掲げて戦うと同時に、こういうふうな悪いことをしていると、これは許すべからざるそういうふうな悪いことをしているということを強調して、民主主義国家が団結して圧力を加える方法しかないです。

Ｑ：黄先生、昨日、本日と２日間に渡りお話を伺えて本当にありがとうございます。２つご質問をさせていただきたいんですが。

私たちの家族、拉致被害者は金正日政治軍事大学で教官をさせられていたという情報を得ています。ただ、北朝鮮は金日成総合大学の存在は認めていますが、金正日政治軍事大学の存在は認めていないと思います。これは実在する大学なのでしょうか。これ基本的な問題です。

あともう１つ、先ほど先生がおっしゃった、軍部の下部の人間は非常に金正日に対して大きな恨みを持っているとおっしゃっておられましたが、その軍部によるクーデターの可能性というのはやはり現在のところは見えないのでしょうか、将来的にはどうなんでしょうか。

その２点をお伺いしたいと思っております。

Ａ：政治軍事大学はあります。存在しています。私記憶が定かではないんですが、日本語を学ぶ、日本語の教育にそこを使っているという話は聞いたことがあります。

そして、先ほどもお話ししましたが、軍部の人々の恨みがあるのではなく、軍隊は大変多いわけですね。ただ、旅団長以上は特別待遇をしています。ですから、旅団長以上は１年に一度、例外なく中央党に来て２週間研修を受けます。彼らに対しては特別待遇をしています。しかし、それ以下の人々に対しては特別待遇がありません。ですから、生活はまさに悲惨そのものです。ですから、その人たちには洗脳教育をしても恨みがあるわけですね、恨みが積もっていくわけです。

そして、その金日成大学の総長を長い間私しました。もちろん名前だけの肩書きでほかの仕事をしていたんですけれども、最高人民会議の議長もし、とにかく14年間総長でした、名前だけの。総長をしたということで、人々が訪ねて来るわけです。１、２年生のときには何も知らず勉強して、そして３、４年生になると首領制度に対して反対をし、抗議をしなくてはならないといって学生たちが来ます。そして、グループをつくって、いわゆる自分たちの闘争綱領なんかをつくって持ってくるわけです。それで、これをどう処理したらいいでしょうかという質問があるんですね。今、蜂起すれば犬死だと、どこで殺されるかもしれない。次に軍隊の下の軍人が蜂起するときに、または退役軍人が蜂起するときに一緒に立ち上がれと言いました。

ですが、現在軍部のクーデターが起きる可能性は全くありません。彼らはそういった思想よりは絶対服従の思想だけを教育されております。そういった考えも及ばない、そういった人々なんです。

○司会　それでは、大変恐縮でございますが、ほぼ予定の時間となりましたので、黄先生におかれては大変長時間にわたりまして、誠にありがとうございました。壇上のほうからもとの席のほうにお戻りいただけますでしょうか。

どうもありがとうございました。（拍手）

（了）